



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1984 精道教育促進協会 (芦屋)三十一・三四五二 芦屋市船戸町12-6

教皇様の聲

辛いなるかな、 悲しむ人は……

「すべての人よ、諸聖人の祝日を祝い、主のうちにあって喜べ。」

1 最愛の親族の墓地で祈るために集う今、主のうちにあってよろこべという招きは、時にも場所にもしっくりこないように思われま

す。事実、本日は死者の記念日の前日ですから、厳粛な思い、また、死者をいたむ悲しみや追憶にふける方が自然なのではないでしょうか。

ついてははっきりとお教えくださいました。「辛いなるかな、悲しむ人は、彼らは慰めを受けるだろうから。」(マテオ5・4)

聖人たちの法典

2 至福八端は、聖人たちが千差万別の一生を送りつつ、数多くの霊感をひきだしてきた法典であります。「すべての国と民族と民とことばの、数え切れないおびただしい大群衆」

(黙示録7・9)の一人ひとりが、至福八端から霊感を得てきました。老若男女、司祭と信徒、男女修道者、観想あるいは活動修道士などの一人ひとりは、主のお教えになった生活綱領ともいべきものを真剣にうけとって実行に移す努力を重ねた結果、救いを得て御父のみ国に入ることができました。だから彼らは、「白い服をつけ、手にしゅろの枝をもち、玉座のみ前と小羊のみ前に立ち、大声で叫んで、『救いは、玉座に座する私たちの神と小羊のものである』と言った(同上9・10)のです。福音的清貧や苦しみをキリスト教的にうけ

入れるべきこと、正義と平和のために尽力すべきこと、さらに心の清さ(マテオ5・1・12参照)など、これら至福八端の一つひとつを吟味している時間はありませんが、一つだけどうしても指摘しておきたいことがあります。それは聖人たちの、頭のなかだけでなく実際の生活のなかに確立させた従順の關係というものが、永遠の救いを得るために彼らにとっ

聖人とは

3 聖人とはどういう人のことでしょうか。黙示録が答えを与えてくれています。「彼らは大きな患難をぬけ出た人々である。小羊の血で自分たちの服を洗って白くしたのである。」(黙示録7・14)

聖書の言葉は、私をはじめに申し上げたこと、つまり悲しみからよろこびへの移行(変化)を確認してくれれます。(…)ところで、「小羊の血で自分たちの服を洗って白くする」とは、宝物を充分に活用することを意味しているのではないのでしょうか。「小羊が群れをあげなかった」ということばが正しいのであれば、聖人たちは、至福八端にいう諸徳の模範であるばかりでなく、キリストの贖いのみのり(玉)を充分に活用した人々と言えます。聖人たちは、宝を活用し、小羊の「白さ」に与り、「玉座と小羊のみ前で」行なわれる天上の典礼を、私たちに先立って祝う人々たちなのです。

「諸聖徒の交わり」についてはいくどとなく耳にしてきました。「交わり」とは親密な一致のことであって、単なるつき合いや意志の疎通のことではありません。超自然のレベルでは、成聖の恩寵を有する教会の生きる肢体、とくに、光栄をうけ

てすでに幸いな者となった勝利の教会の人々の間の親密な一致をあらわしています。(…)私たちが聖人たちに感謝の心をあげなければなりません。賞賛に値するが、その位置する高みのために私たちから遠くへだたった聖人としてだけではなく、私たちがこの地上を旅するあいだ身近にいていつ何時でも助けの手をさしのべようと待ちかまえてくれる兄弟姉妹として、彼らに感謝すべきだと思います。聖人たちは贖いをもたらす小羊のかたわらにいて贖いの功徳に与る人たちですから、私たちのために超自然の宝物へ近づく道を開くことができます。すでにキリストに属する人々の間の「交わり」は聖人たちの場合、さらに緊密な絆となり、この地上を歩む私たち人間にとってはすこぶるみのりゆたかな絆

□死者のための取りつぎが欠けることにでもなれば、心をうつことばを尽くしたところで、死者の日の意味を失ってしまうでしょう。

□キリストの贖いの功徳に与り、その功徳をこの世を去った人々に代願として贈りましょう。

です。兄弟姉妹たちの大群衆につきまわれ、守られて、信頼の心をあらたにし、汚れのない小羊の歩みを進めます。小羊が死と復活によって成就させた贖いのみのりを、言わば、「個人的に自分のものとする」ために。

この世のかなたに

4 今日、聖人、明日の死者。教会は教育者としての賢明な直観により、時間的につながらざる二つの考えを一文にまとめています。地上を旅する人々の運命をのべるとは言え、この世のかなたの生活と切りはなして考えることはできないからです。というわけで教会は、聖人について黙想せよと勧めるかたわら、この世を去った兄弟姉妹にも思いをはせるよう教えています。さらに言うならば、私がこれまでお話ししてきた「諸聖徒の交わり」は、当然この世を去った人々にもあてはめなければなりません。彼らと私たちとの間には一致の絆があるからです。聖人たちの模範にならない、キリストの贖いの宝(功徳)を思い切り活用する点について強調したかったわけですが、それならば、とくに今日と明日、私たちはこの「功徳」に与り、その功徳をこの世を去った信者に代願として贈ってあげなければなりません。(…)

本日私は、死者に対する美しくして具体的な愛徳の行為としてお願いしたいことがあります。それはとりもなおさず、「諸聖徒の交わり」の働きであり、証拠となるものです。万一、取りつぎの折りが欠けることにでもなれば、たとえ、人間的に心をうつことばを尽くしたところで、死者の日は意味を失ってしまうこととでしょう。伝統的なその行為の一つとして私はとくに、免償のおくりものをとりあげたいと思います。夕映えがあたりをおおい始める今、聖人と天国の幸いな人々を思うにつけ、典礼の「主のうちにあってよるこべ」という招き、この世を去った人々への思いにもつながりますように。ここで、再び、よろこびと悲しみという相異なる思いや感情がキリスト教的希望という高次の点で一つになり、希望の二つ、消えることのない希望でありますから。(ローマ5・5参照)

無原罪の御宿り

1 待降節中の大切な日でもある今日、教会はマリアの無原罪の御宿りの祝日を喜びに満ちて祝います。(…)

たしかに、マリアがその存在の最初の瞬間から原罪をまぬがれておられたことは、キリストのみわざの最初のみりを示しています。また、処女マリアと御子の託身をしっかりと解きえない絆で結んでもいます。キリストはご自分の誕生以前に、いとも崇高な方法でマリアを贖われました。マリアのこの偉大な秘義(無原罪の御宿り)は、人間の救いが歴史の舞台に入ったことを示すわけですが、それ以前にすでに神なる御父の永遠の計画に含まれていました。キリストの功徳を前もってマリアにあてはめて原罪をまぬがれさせ、やがて救い主にふさわしい母にすべく予定しておられたのです。全被造界と天使たちの歌声の間で賞揚される崇高なマリアの無原罪の御宿りは、恩寵にみちあふれたすばらしい準備でした。すなわち、マリアという人格全体が最初の瞬間から原罪をまぬがれた自由の身になる、つまり最高の自由を得るよう準備され、全人類の救いのためにキリストとその贖いのみわざに仕えることになっていたのです。

教会は初期のころから、マリアが「恩寵に満ちている」こと、およびキリストによって贖われたその特別な方法について、深く思いを巡らせてきました。何世紀にもわたって辛抱強い探究が続けられ、マリアの御宿りの祝日はますます広く拡がりました。そのうちに教導職が介入し、一八五四年、ピオ九世はマリアの無原罪の御宿りを信仰の真理として定義されたのです。

2 マリアとキリストを密接に結ぶこの真理を知った私たちは信仰によってその豊かな意味を感知し、よろこびにみたまされています。

人類のための神の永遠のご計画にみられるように、マリアは母性という不朽の絆で人となられたみことばにしっかりと結びつけられ、永遠からキリストの贖いのみわざの協力者となったのです。この使命を果たすために、マリアがこの世に生をうける最初の瞬間から原罪の汚れを全く免れたのはふさわしいことでありました。

—何世紀にもわたる人間の歴史の中でも、マリアの無原罪の御宿りは、聖霊の無償の働きの最も完全なみものといえます。聖霊は、マリアが生を受けた瞬間から彼女を新しい人、処女地、聖霊の神殿になさいました。この驚

病院で

十字架につけられ、のちに

よみがえったキリストへの信仰

復活祭のころ教会の典礼は、心をはずませながら「キリストはよみがえり給えり、アレルヤ」とくり返し、感謝とよろこびを示せ、とうながします。(…)

このように私たちが熱狂するのは、やはり復活が素朴ではあるが、根本的に重要なできごとであるからです。キリストの復活はイエスが神であらせられることを証明したことを

くべき関係の中に、マリアの御宿りの時以来私たちが祝い続けている信仰の重要な要素がひそんでいます。人間から生まれると同時に聖霊の御働きで生まれかわるといふ二つの出来事がマリアの御宿りのときに実現し、その結果人類は創造の初めにもどったことになるのです。

—歴史の中にも、またキリストによる救いの方法のうちにもみられるように、マリアの無原罪の御宿りが、マリアが最初に贖われた人であることを示すゆえ、贖いの始まりを意味しているのはたしかです。けれどもそれだけではありません。マリア以外の全人類にとつて、贖いは罪からの「解放」を意味します。すべての人同様、贖いが必要とするマリアにとつて、贖いとは、生を受けた瞬間から、全世界を救うかけがえのない唯一一人の救い主であられるキリストの功徳のおかげで、原罪を「免れた」状態を意味しているのです。(一九八三・十二・八)

神のご計画を信じるなら、

病氣や苦しみにさえも

価値や意味を見出すことができます。

見出すことができます。

になる。従って、キリストの使信と私たちの救いが真実であることを明らかにすることになるわけです。イエズスは断言なさいました。「私は復活であり、真理であり、生命である。(ヨハネ11・25、14・6) また、ピラトの前では少しも恐れることなく、私は真理を証明するために生まれ、そのためにこの世に来た(同上18・37)とおおせになりました。復活はキリストの啓示と救いの使命を最終的に保証するものであり、従ってイエズスのおことはを信ぜよ、ということになります。そ

説教・講話・書簡等の抄訳

うすれば、十字架につけられ、死者のうちよりよみがえったキリストを信じることは、生命や、健康の価値を認めることにもなるのです。現在不幸にも、健康を損われた人、生命をすり減らして生きる望みさえ失っている人が大勢います。悲しい限りです。復活したキリストの光を見失うなら、悲劇的な事態が続々と生じることでしよう。よみがえられたイエズスはおおせになっていきます、生命は神からいただいたもの、大切にすべき貴重な贈り物である。私たちはいかに生きたかについて神に申し開きをしなければならぬ」と。

十字架につけられ復活したキリストを信じることは、個人の生活と歴史の流れのなかで働く神の摂理を信じることです。先を見通す神のご計画を信じるなら、病氣や苦しみにさえも価値や意味を見出すことができます。苦しみのうちにある人は、ゲッセマニの丘でのイエズスと共に、父よ、できればこの杯を私から取り去りたまえ(マテオ26・39)とお願いで当然でしょう。(…)しかし復活されたイエズスは、勇気をだし信頼の心で共に繰り返せとおすすすめになっています、しかし、私の意のままにはなく、あなたのみ旨のま

まに(ルカ22・42)と。復活されたキリストをながめれば、さまざまな出来事を讀いと永遠という展望のなかでみる事ができるようになる。慈悲あふれる愛情とご聖体における秘跡の現存のおかげで、キリストの秘義をいと高き御者への全き信頼の心で受けることができるようになるのです。

苦しみのときには、どのような慰めの言葉よりも、むち打たれ、いばらの冠をかむせられ、十字架につけられ、そのち栄光のうちによりよみがえったキリストの沈黙の方が、はるかに力を与えてくれます。(…) 皆さんが、

この救いの義の意味をより深く黙想し、信実の内的改心を通して真のキリスト信者として日々の生活を目指してかかれるよう、望んでいます。(…)

カルワリオでの苦しみののち、復活の光のうち輝くとも聖なるマリア様の取りつきにより、王であらせられるキリストが主にさげられたこの病院をつねに照らし、医師や職員の方々が導き支え、病に伏す人々すべてを慰め力づけてくださいますように。

深い愛の心でさしあげる私の祝福がいつまでも神のお恵みを呼びますように。

日曜日のミサの重要性

過ぎ越しの秘義

教会の聖伝全体のなかで、(日曜日のご)聖体祭儀は、イエズス・キリストのご復活に関する教会の信仰を特によく表わしています。聖霊の御力のおかげで、教会は信者たちを呼び集め、ご聖体の秘義を信じる旨、また、イエズス・キリストの死者からの復活によって、私たちを新たに生まれさせ、生きる希望を抱かせる(ペトロ①・3)という秘義を信じる旨、宣言させることができます。ご聖体を中心に行なわれる典礼行為は、使徒の時代からつねに教会が主の日を祝ってきたことを示す特別なものでした。第二バチカン公会議も、日曜日のミサの重要性をくり返し述べています。(『典礼憲章』106参照) 日曜日毎に神の民が招かれ祝うのは、主イエズスの受難と復活と栄光、実に過ぎ越しの秘義全体であります。

日曜日の聖体祭儀

教会の活力の大部分は聖体祭儀からひきだされます。この祭儀中に神の民に示される救いの秘義が、信者の生命の一部をなしてゆくのです。『教会憲章』の表現を借りるならば、神は私たちを一つの民として救いそして聖化することをお望みです。(9参照) 従って、日曜日のミサほど私たちが一つの共同体として親しく一つに結ばれるときは他にありません。

(ご)聖体が教会を築き、また共同体のしるし、成長のみならずとなるのは、実に「ごミサの時であります。(…)

教会共同体が生命をくみとるのは日曜日の聖体祭儀です。ごミサのなかでこそ、イエズス・キリストは人々と共に祈り、人々は主と共に「霊と真理をもって」(ヨハネ4・23) 御父を礼拝する一つの民となります。神の民の尊厳を充分に理解するにはとくに礼拝の面を

考えなければなりません。イエズス・キリストは、礼拝する民、礼拝の共同体として、私たちを御父にお示しになります。(…) 第二バチカン公会議は「何はさておき、主なる神を礼拝」せよ(『典礼憲章』33)と教えています。

尊敬する司教のみならず、私たちは尊い典礼を強調し、人々の心を礼拝に向けて導くことによつて、司牧面で大きな貢献をすることができると確信しております。人々が「選ばれた民族、主の司祭職、聖なる民」(ペトロ①2・9)となるよう召し出されていること、またイエズス・キリストと心をあわせて御父を賛美し御父に感謝するよう召されていることを、聖霊の恩寵のもとで充分理解すれば、信仰生活に測り知れない力が加わります。賛美と贖いの犠牲をイエズス・キリストと共に捧げ、自らの祈願はことごとくキリストの無限に完全な祈りと一つに結ばれていることを悟るなら、キリスト信者全員に生き活きた希望と新たな勇気が生まれてきます。この点については、特に若者たちの間に敏感な反応がみられます。

今世紀の典礼刷新全体のうち、すでに経験で実証するの点と云えば、すべての人が典礼に全力をあげて積極的に参加すべきという点です。これこそ「信者が真のキリスト教的精神

礼拝を望む心

教会の全成員にとつて、ご聖体、特に日曜日のご聖体は、生活全体の源泉であり頂点であります。信者の全活動、すなわち、福音に生きようとする努力、キリストの証人たらしめとする努力、家族生活や社会において約束を履行する努力など一切の努力が、ご聖体の力、とりわけ日曜日の聖祭におけるご聖体の力を支えとし、それによって高められています。

信者が世の中の活動を神に捧げるとき、あらゆる努力に必要な霊感と力を得ることができると、やはりご聖体の犠牲からであります。聖体祭儀に与ることは、信徒の一週間の生活中ほんのわずかの部分を占めるにすぎません。しかし、生活を刷新してよりキリスト教的にするために、このわずかなひとときほど大きな力になることも他にはないのです。聖体祭儀こそ、真のキリスト教精神を育むために欠くことのできない第一の泉であります。

(七・九 米國司教団へ)

不変の教え

結婚の倫理



まず、回勅『フマーネ・ヴィテ』の11番を讀んでみましょう。「教会は、自然法を不断の教えによって解釈し、その法則を守ることを求め、『夫婦行為の一つひとつ』が、それ自体、生命の産出に向けられていなければならないと教えています。」

同時に回勅は、同じところで、考えるというより強調すると言うべきでしょうが、「意義」とくに「夫婦行為の二つの意義」について述べ、主観的心理的な面に触れています。意義が明らかになるのは(存在論的)真理をしっかりと「読み直した」ときであり、その読み直しを通して(存在論的)真理はいわば、認識できるようになります。つまり、主観的心理的面があらかになるのです。回勅は、とくにあとの方に注意を引こうとしているようです。この点は次の本文によっても間接的に確認されています。「この教えが人間理性にかなったものであることを、現代人はもっともよく理解できると私は考えます。」(『フマーネ・ヴィテ』12)

倫理規準とその根拠
「理性的な性格」は、夫婦行為の根本的構造に見合う存在論的真理に関わることからですが、それだけでなく、夫婦行為の親密な構造を正しく理解すること、つまり、構造に呼応した意義と、倫理(道徳)的に正しい行動からみて切り離すことのできない関係とを、適切に「読み直す」こと、言いかえれば、主観的心理的側面にかかわる真理です。実はここで、道徳規準と性に関する行為を

その規準に合わせることにポイントになります。こういう意味で、道徳規準は「身体の言語」を真理において「読み直す」ことであると言えるのです。

回勅『フマーネ・ヴィテ』は以上のように、倫理規準とその根拠(少なくとも倫理規準の根拠となること)を吟味しています。さらに、規準による倫理価値は良心を拘束するものとして示されているので、規準に合った行為は倫理的に正しく、規準に反する行為は内的に不法な行為となります。回勅の著者は、この規準が「自然法」に属すること、つまり、理性に合致していることを強調しています。この規準は文字通り聖書に記載されているわけではありませんが、教会がこれを教えるのは、自然法の解釈は教導職の役目であると確信しているからです。

ここで私たちはもう一步踏み込んで次のように主張することができると思います。回勅『フマーネ・ヴィテ』に記載された道徳法はたとえ聖書のなかに見つからないとしても、パウロ六世教皇が書かれたように、聖伝に含まれているのです。事実、「教会教導職がしばしば説いてきた」教えですから(『フマーネ・ヴィテ』12)、聖書にふくまれる啓示された教え全体と一致した規準であることは明らかです。(同上4参照)

神が啓示なさった教え
聖書に含まれた倫理の教え、その本質的な前提、内容の全般的性格など、全体を考えるという問題のみにとどまりません。以前私が

「身体の神学」について数々の分析を行なったような、より大きな枠内で考えるべき問題です。

このようにより大きな背景のなかでみると、前述の倫理規準は自然道徳(倫理)法に属するだけでなく、神が啓示なさった倫理秩序に属することも明らかになります。また、この点からみると、この倫理規準は、聖伝と教導職が伝えてきた教えや回勅『フマーネ・ヴィテ』の教えと異なったものではありえないこともたしかです。

パウロ六世は、「この教えが人間倫理にかなったものであることを現代人はもっともよく理解できると思う」と記しています。ここで次のように加えることができると思います。「人びとはこの教えが聖書という源泉からである聖伝の伝えるところと完全に一致していることを理解できる」と。今のべた一致の基礎は聖書の人間観に求めるべきでしょう。人間観は、倫理(道徳)の教えにとってさぶる重要な役割を果たします。というわけで、「身体の神学」の中に、「体」としての人間の問題、「二人は一体となる」(創世2・24)というときの人間の

問題に関する倫理規準の根拠を求めるのは、まことに筋の通ったことだと言えるのです。
読み直し、考察する

回勅『フマーネ・ヴィテ』の規準はすべて人間に関わっていますが、それは、規準が自然法の規準であるとともに、人間理性に合致するという事実があるからです。もちろん、信者にとってはなおさら関心の深い規準であります。これが理性にかなった規準であるという事実が、間接的に「身体の神学」全体に確認され支持されていますから。

自然法の規準は、福音の言葉と聖霊の力づよい浄めの御働きのうちに、新たな表現だけでなく、より完全な人類学上、倫理的根拠をもみつけることができます。

以上のような理由で、信者各位、とくに神学者は、回勅の教えを全体のコンテクストのなかで読み直し(再解釈し)、より深く理解しなければなりません。

私たちが少し時間をかけて考察を加えてきたのも、実は、この「読み直し」の試みなのです。(一般謁見(一九八四・七・十八))

●年間購読料のご案内

一月号より十二月号までの年間購読料は八〇〇円となります。二〇部以上まとめてお送りする場合は送料・手数料は無料となりますが、一部から十九部まではこの場合も五〇〇円となります。

【例】四部の場合 八〇〇円×四部 十五〇〇円＝三、七〇〇円
教会宛二部以上まとめてお送りする場合は送料・手数料は無料となります。

●専用保存ファイル発売中

『教皇様の声』を約三年分保存できる専用保存ファイルがあります。定価六〇〇円(送料無料)ポリプロピレン樹脂製



『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部六十円送料六十円
■一年予約七百二十円送料七百二十円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替 神戸 3-72393